紫式部集からの挑発

――私家集研究の方法を模索して

廣田收
横井孝
久保田孝夫

笠間書院

出收・横井孝・久保田孝夫

宗式部集からの挑発

私家集研究の方法を模索して

笠間書院

●著者紹介

廣田　收（ひろた　おさむ）

略　　歴　1949年　大阪府豊中市生まれ。
　　1976年　同志社大学大学院修士課程修了
　　現　在　同志社大学文学部教授・博士（国文学）

主要著書　『『宇治拾遺物語』表現の研究』（笠間書院　2003年２月）
　　『『宇治拾遺物語』「世俗説話」の研究』（笠間書院　2004年10月）
　　『『源氏物語』系譜と構造』（笠間書院　2007年３月）
　　『家集の中の「紫式部」』（新典社　2012年９月）
　　『『紫式部集』歌の場と表現』（笠間書院　2012年10月）

横井　孝（よこい　たかし）

略　　歴　1949年　東京都世田谷区生まれ。
　　1977年　駒澤大学大学院博士課程満期退学
　　現　在　実践女子大学文学部教授・文学修士

主要著書　『〈女の物語〉のながれ―古代後期小説史論』（加藤中道館　1984年10月）
　　『円環としての源氏物語』（新典社　1999年５月）
　　『源氏物語の風景』（武蔵野書院　2013年５月）

久保田　孝夫（くぼた　たかお）

略　　歴　1950年　北海道旭川市生まれ。
　　1974年　同志社大学大学院修士課程修了
　　現　在　大阪成蹊短期大学グローバルコミュニケーション学科
　　教授・文学修士

主要著書　『松浦宮物語』（共）（翰林書房　1996年３月）
　　『淀川の文化と文学』（共）（和泉書院　2001年12月）
　　『紫式部の方法』（共）（笠間書院　2002年11月）

紫式部集からの挑発―私家集研究の方法を模索して

2014年５月30日　初版第１刷発行

著　者　廣　田　　收
　　横　井　　孝
　　久保田　孝　夫

装　幀　笠間書院装丁室

発行者　池　田　圭　子

発行所　有限会社 **笠間書院**
東京都千代田区猿楽町2-2-3
NSビル302　〒101-0064
電話　03（3295）1331
fax　03（3294）0996

NDC分類：911.128

ISBN978-4-305-70729-1
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
出版目録は上記住所までご請求下さい。
http://kasamashoin.jp/

印刷／製本：モリモト印刷

© HIROTA・YOKOI・KUBOTA 2014

まえがき

紫式部の作品のなかでも『紫式部集』は研究の歴史が浅く、『源氏物語』に対してはいうまでもなく、『紫式部日記』に比しても手薄の感は否めない。しかし、私家集研究の状況を鳥瞰してみると、そこに拡がる景観は、作品によってかならずしも均一ではない。他とくらべ、『紫式部集』の研究文献はとびぬけて多く見うけられるからである。久保田孝夫編『紫式部・紫式部集研究年表』（『紫式部集大成』所収）によれば、二〇〇七年末現在ですら、紫式部その人や『日記』の専著を除いて三〇〇編の多きを数えるのである。それ以降も着実に増えつづけている。これは、『源氏物語』や『紫式部日記』の作家の家集であることとの関係ぬきには考えられない現象であろう。

しかし、本書の著者三人が『紫式部集大成』を上梓するまで、こんな一二〇首ほどのちいさな歌集であっても、基礎資料の集積さえおこなわれていなかったのである。しかも、他の私家集と比較して論考の数が多いとはいえ、研究者たちの関心のありかには偏りがあって、未解決の問題はまだまだ少なくないのではないか、と考えられる。

定家本と古本という二大系統の成立の問題、それぞれの構成の問題、写本としての伝流の問題。古本系の「日記歌」に関連して『紫式部日記』との関係の問題。かならずしも紫式部の生涯ある

いは生活全体を網羅しているとはいえない、「選歌」あるいは「欠落」の問題。追悼歌、恋愛歌、旅程の問題、等々。思いつくかぎりあげていっても、これらは残された課題、というよりも、いまだ解決には程とおいと思わせる問題ばかりである。

『紫式部集』は、かつては伝記研究の資料としてあつかわれるところに研究の端緒があった。本集をその束縛から解き放ち、ひとつの「作品」として対象化したいというのが、かねてから著者三人に共通する願いであった。もとより『紫式部集』は平安中期のなかで孤立する存在ではありえない。私家集のみならず他の作品の研究成果が『集』の理解を押しあげてきたし、今後もそうであらねばならないだろう。そしてそれと同時に、『紫式部集』の考究が他の作品の研究に対して、幾分かの底上げを促すことも充分考えられるはずである。そこで本書の題名を「紫式部集からの挑発」とした。

左注にせよ追悼歌にせよ「日記歌」にせよ、あるいは地名の考証にせよ、はたまた写本の伝流の問題にせよ、ここであつかった問題点は、前人未踏というわけではない。ただ、いずれも諸家の見解が噛みあわなかったり、なおざりにされたりして、議論が深まっていなかったものである。これらの課題群を著者三人が分担して、あらためて検証してみることとしたのが本書である。

『紫式部集大成』にひきつづき私たちは『紫式部集注釈大成』（仮題）にとりかかっているが、その注釈作業のなかから、その前提として基礎的見解をまとめておく必要を強く感じるようになったのが本書を編むことになった、そもそものきっかけである。著者たちが『集』における研究の現状と課題を討議してゆくうちに、本書におさめたような「鼎談」が持たれることになり、さら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に本書所収の各論考が生まれたわけである。私たち自身がまず『紫式部集』によって、その研究を深めるべく「挑発」されたようなものである。

私たち三人は、前著『大成』によって、多くの研究者が基礎資料にふれることが容易になり、いささかではあるが、斯界に貢献できたのではないかと自負するものである。願わくは、本書もまた同様に、『紫式部集』を一箇の「作品」としての研究を推し進め、さらに隣接分野の研究をも「挑発」する発条たらんことを。

二〇一四年四月

横井　孝

紫式部集からの挑発・目次

——私家集研究の方法を模索して

まえがき　i

1　『紫式部集』左注とは何か……1
——謎解きと跨ぎの機能——

2　『紫式部集』四番・五番歌の解釈追考……15
——「女はらから」に対する垣間見と求婚——

3　『紫式部集』における哀傷……26
——贈答歌の中の追悼——

4　『紫式部集』日記歌の意義……45
——照らし返される家集本体とは何か——

5　『紫式部集』の末尾……61
——作品の終局とは何か——

6 『紫式部集』における定家本とは何か ……85
——表記からの展望——
7 帥宮追悼歌群における和泉式部の和歌の特質 ……102
——表現形式をめぐる紫式部の詠歌法との違い——
8 『紫式部集』の中世 ……121
9 鼎談『紫式部集』研究の現状と課題Ⅰ ……143
10 鼎談『紫式部集』研究の現状と課題Ⅱ ……185
11 紫式部・紫式部集研究年表（補遺稿） ……207
あとがき 227

1　『紫式部集』左注とは何か

――謎解きと跨ぎの機能――

はじめに

『紫式部集』の特質は、歌の選択と配列の特異性にだけあるのではない。たとえば、『紫式部集』の左注は、この家集の編纂の特質を考える手がかりとならないか。勅撰集『古今和歌集』の左注を比較、対照させてみたい。

まず、陽明文庫本『紫式部集』の左注の事例を探すと、次の六つの事例を挙げうる。

事例1

（1）はやうよりわらは友達なりし人に、年ごろ経て行きあひたるが、ほのかにて、十月十日のほどに月にきほひて帰りにければ

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲隠れにし夜半の月かな

（2）**その人遠き所へ行くなりけり。**秋の果つる日きて

あるあか月に、虫の声あはれなり
泣き弱るまがきの虫もとめがたき秋の別れやかなしかるらん

事例2

(31) 文のうへに朱といふ物をつぶつぶとそそきて涙の
色をとかきたる人の返り事
くれなゐの涙ぞいとどうとまるるうつる心の色にみゆれば
もとより人のむすめをえたる人なりけり

(32) ふみちらしけりとききてありし文どもとりあつめ
ておこせずは返りごとかかじと、ことばにぞのみ
いひやりたれば、みなおこすとて、いみじくえん
じたりければ、正月十日ばかりのことなりけり
とぢたりしうへのうすらひとけながらさはたえねとや山の下水

事例3

(42) なくなりし人のむすめのおやの手かきつけたりけ
る物を見ていひたりし
夕霧にみしまがくれしをしのこのあとをみるみるまどとはるるかな

(43) おなじ人、あれたるやどの桜のおもしろきことと
てをりておこせたるに
ちる花をなげきし人は木のもとのさびしきことやかねてしりけん
おもひたえせぬとなき人のいひける事を思ひいで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たるなりし

事例4

(87) ものや思ふとひとのとひたまへる返りごとに、九月つごもりに

をすすきが葉わきの露やなににかくかれ行く野べにきえとまるらん

(88) **わづらふことあるころなりけり**。かひぬまの池といふ所なむあると、人のあやしきうたがたりするをききて、こころみによまむといふ

よにふるになどかひぬまのいけらじと思ひぞしづむそこはしらねど

(89) 又心地よげにいひなさむとて

心行く水の気色はけふぞみるこやよにかへるかひぬまの池

事例5

(103) 人のおこせたる

うちしのび歎きあかせばしののめのほがらにだに夢を見ぬかな

(104) **七月ついたちころあけぼのなりけり**

しののめの空きりわたりいつしかと秋のけしきに世はなりにけり

事例6

(110) すまひ御覧ずる日、うちわたりにて

たづきなき旅のそらなるすまひをばあめもよにとふ人もあらじな

(111) 返し

いどむ人あまたきこゆるももしきのすまひうしとは思ひしるやは

雨ふりて、その日ごえむはとまりにけり。あいなの
おほやけごとどもや

（一行空白）

一瞥してまず注目できることは、右の六つの左注の事例の中で、「なりけり」で結ばれる左注が四例見出されることである。私は、そこにきわめて意図的なものが働いていると感じる。

南波浩は左注について、著作の中では残念ながら、あまり触れるところがなかった。

南波は、**事例2**（31）の「もとより人のむすめをえたる人なりけり」について、「前歌〔三一〕の左注なのか、次の〔三二〕の詞書なのか、判別しがたい」と評している。[1] ただし、「〔三一〕の左注とみる場合」は「回想的な追記的左注とも考えられ」るとしつつ、「式部の内面心理を語ろうとしている左注としても生きてくる」という。[2] ここでの左注の機能は、前歌に対する注としての意味付けでしか考えられていないことが分かる。これは左注を機能的に捉える視点であるが、次歌との関係は捨象されている。

また南波は、**事例4**（87）の左注「わづらふことあるころなりけり」を、伝本の形態上から、「現存伝本のほとんど」は、次の「詞書として記して」いるが、三条西家本他三本が「行の末で終っている」ので、左注か詞書の冒頭文かが判別できないという。さらに、「注目すべきは、実践本・瑞光寺本・元禄刊本の三本が、『わづらふ事あるころなりけり』で切り、以下を改行している点」であるとして、これは明らかに左注であると指摘する。[3] そして「『実は、病気をしていた頃だったのだ』と、説明した左注とみた場合の方が、はるかに関連性が密接である」という。[4] これは左注を機能的のみな

らず形態的に捉える視点である。

南波は、**事例6**「雨ふりて、その日ごえむはとまりにけり。あいなのおほやけごとどもや」についても形態的に捉えている。[5]

これらに、南波の左注に対する理解の一端を知ることはできるが、さらに表現に即して左注の機能を考える必要があろう。

ちなみに、『紫式部集』の左注に関して、陽明文庫本で得られる左注の事例を、実践女子大学本と対照させてみたところ、歌の配置は異なるが、基本的に両者の間には表現上の異同が（殆ど）ない。つまり、左注には自撰的性格が共有され、保存されているのではないかと考えられる。

事例1の場合、「**その人遠き所へ行くなりけり**」は、（1）歌「めぐり逢ひて」の童友達が「月にきほひて帰」ったわけを謎解きしている。と同時に、（2）の詠歌の場を導いてくる。それを今仮に跨ぎの機能と呼んでおくことにしよう。

このような跨ぎの顕著な事例が、

事例2　（31）（32）
事例4　（87）（88）
事例5　（103）（104）

などである。興味深いことは、これらが『紫式部集』の前半だけでなく、後半にも存在することである。つまり、大きな歌群配列の異同は、二つの伝本系統の存在とは別に、跨ぐ役割をもつ左注は前半・後半ともに同様に認められるのであるから、前半・後半のいずれかが自撰か他撰かというふうに、編纂の問題は二者托一的な理解では解決できないことになる。

一　『古今和歌集』の左注

数年前、横井から「南波先生は左注についてどんなことを述べておられるのか」という旨の質問をいただいた。左注の問題については、確かに先生の著作の中には、右に見たように個別に触れられている以外には、纏めて論じておられないが、かつて詳細な考察をうかがった記憶があったので、学生時代の講義ノートを繰ってみると、およそ次のような内容を話されていた。一九七五年五月一日、大学院の特殊講義は「紫式部集の成立　自他撰の問題」と題する講義であった。その項目だけを示すと、

（一）歌が精選されていて歌屑のないこと
（二）伝本に関する問題

というもので、続いて五月八日は、

（三）詞書が一人称であること
（四）当人ならではと思われる微妙な内面心理の表白を示す詞書の多いこと
（五）敬語の使用に統一性のあること
（六）左注にみられる特質

というものであった。この（六）の内容は、およそ次のようである。表現はノートのまま記しておくことにしたい（おそらく口述筆記の形式の講義だったと思う）。

『紫式部集』には五つ（ママ）の左注がある。『萬葉集』の左注は、

右、日本書紀を検するに、云々。

右、山上憶良集を検するに、類聚歌林に、云々。

右一首の歌、今案ずるに反歌に似ざるなり、云々。

などとある。これらは主として史実についての説明であり、理由や出所などについて記したものであって、歌の内容あるいは内容についての解釈を補おうとしたものではない。『古今和歌集』においても、四二箇所の左注が見られるが、それらを分類すると、

一　読人不知とある歌の作者について、

ある人のいはく先のおほきおほいまうち君のうたなり

のように異伝を記すもの（二七例）

二　歌詞についての異伝記しているもの（七例）

三　歌の状況設定についての付記（八例）

このうたはまた殿上ゆるされざりける時に、めしあげられてつかうまつれとなむ（二六九番歌）

となる。重要なことは、これらの左注は、貫之撰の奏覧本には全く見られない。つまり、いつのころか、後人によって付記されたものである。後人が書写の際に、見聞きしたことを付加したのである。これらのうち、『紫式部集』の解釈・鑑賞に有効であるのは、三のケースである。しかし、中には、

寛平の御時、菊の花をよませ給ふける比、ゆきあひて

とあるものもある。敏行は延喜元年右兵衛の督従四位下で、寛平以前に殿上人（従五位上）となっているので、事実に反するような左注もある。

『後撰和歌集』は、四六・九二・一四六・三四六番歌に見られる。四六・三四六番歌は歌の成立時期について、九三・一四六番歌は、歌の作者についての説明である。これらは歌の鑑賞の一助にはなろうが、歌の内容との関係は、間接的である。

『拾遺和歌集』は、五二四・五三一・五六四・五八七・一三二一・一三五〇番歌の六箇所である。

歌の出所、作者については、五二四・五八七・一三五〇番歌があり、後日譚は五三一・五六四・一三二二番歌で、すべて歌の内容の解釈には直接関係ないものである。

『後拾遺和歌集』は、合計一二例。

一　作者についての伝承　二六五・六〇〇・一〇〇七・一一六四番歌の四例。

二　歌の後日譚　一一七・一一一六番歌。

三　歌の状況設定　五六五・五九八・五九九・六〇一・六〇八・一一〇五番歌の六例。

ここでも、歌の内容、鑑賞に直接的に寄与するのは三の場合である。

ところが、以上挙げた勅撰集の左注は、撰者たちが記したものではなく、後人がその歌についての伝承、歌語りを付記したもので、中にはその信憑性が疑われるものも見られる。

さらに、私家集についてみると、『元良親王集』三例、『公任集』二例、『御堂関白集』一例、『伊勢大輔集』一例、以下『本院侍従集』一例、『曽丹集』一例、『為頼集』一例と、左注は非常に少ない。左注の数のやや多いのは、『清輔集』八例、『定頼集』五例、『兼頼集』四例などである。

このうち『清輔集』では、歌の制作時の状況説明が一例、歌の功徳が七例である。歌の功徳は、加階を所望し歌のあはれによって加階されたもの、臨時祭の歌人として召されたもの、造内裏の折に加階の許されたもの、などである。これらはさほど文学的な意味を持っていない。『定頼集』では、「御返しとて」が二例ある。そのうち一例は、状況設定とか返歌のないことを記すごとき事務的な左注であり、定頼自身の左注ではなく、後人の付記したものである。また『兼頼集』も同様である。すなわち、人物説明、後日譚など後人の付記である。

以上見てきたように、私撰・勅撰を問わず、その多くは単純な事実の説明に堕している。歌の趣意を引き立て、鑑賞に役立てるという機能を発揮しているものは殆どない。これに比して、『紫式部集』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com